THE BOOK REVIEW PRESS
図書新聞 2987号
〒101-0051東京都千代田区神田神保町2-34
電話03(3234)3471 FAX03(3261)4837
購読料(送料共)一年48週11520円
半年24週6240円 振替00160-9-75683
http://toshoshimbun.jp
定価240円
(本体229円)
発行 ㈱図書新聞©

文学

# 繰り広げられる華麗なシネスセジア絵巻

## 訳者による簡潔で的確な説明が連想の花を咲かせ、実存主義的な自己鏡像に野獣派の色彩をそえる

ムルハーン千栄子

アンジェラ・カーター 著
榎本義子 訳
▶花火
九つの冒瀆的な物語
8・25刊 四六判240頁 本体1400円
発行:アイシーメディックス／発売:星雲社

『花火――九つの冒瀆的な物語』は、鮮烈な業績を文学史に刻んで半世紀の人生を閉じることになる英国人女性作家アンジェラ・カーター(1940～1992)が、1969年から2年間の滞日経験を結晶させて、1974年に英国で刊行した異色の短篇集である。

和訳者の榎本義子・フェリス女学院大学名誉教授が、米国の大学院では英文科の常識としてインプットされる思想史と文芸批評の問題意識を駆使した「解説」は、質量とも学術論文級だ。実生活の足跡から、エッセイの引用、日本のインタビュー記事類、在日の友人達への手紙まで、貴重な関連情報がどっさりで、鑑賞と解釈のパースペクティヴを広め深めてくれる。

カーターは欧米の学界で評価の高い研究対象だが、本書は日本人にとってユニークで貴重な資料だ。

まず、①「日本の思い出」で、日本男性が具体的に賛美されている。「背骨はしなやかにすんなりと伸び、肩幅は広く……不思議な両性具有のような美しさを持ち」、豊かな髪は漆黒、肌の感触は滑らかで、まぶたは猫のように奥二重。「彼に防腐処置をして、ガラスの棺に入れて、私の側に置いておきたかった」。

西欧の読者には新鮮な驚きだろう。ハーレクイン発足の1964年から隆盛を誇っているロマンス小説でも、近年はアラブの王子やシークが目立ってきたが、日本人も他の東洋系のヒーローもいまだに登場していないのだ。

③「紫の上の情事」では、レディ・パープルは娼婦役の木彫り操り人形で、「形而上学の隙間からこの世に入り、男たちを破滅させて啓発する恐ろしい存在」だ。「神学的に見れば、この芸術(人形劇)は神を冒瀆するものかもしれない」とあるから、本書の副題がユダヤ・キリスト教の伝統を超える異次元のマジック・リアリズムを指すとわかる。

源氏物語への冒瀆と怒る人は、欧米の大学で教材に使ってみるといい。若紫は幼くして光源氏に誘拐され、洗脳教育され、初夜の翌朝には床に泣き伏し、晩年には六条院で暮らす側室たちへの贈物を源氏と相談してきめる。

「まるで娼家の女将扱いじゃないか。自分ならじっと我慢していない」と、男子も女子も反応は年々同じだった。

吸血鬼の故郷を巡業中に老師のキスで人間化した紫の上が、彼を食い殺して劇場を焼く結末は集団願望に近い。

なにしろ逆転はカーターの主要テーマだ。特に多用されるのはsynesthesia(シネスセジア)。英和辞典では見つけ難いが、十九世紀から英文学でなじみ深い《転移の感覚》だ。日本では完全な他者で「ピンクの頬と青い目とけばけばしい黄色の髪」をもつ第一話の私は、「ラッパのように鳴り響い」てしまうのだ。

⑤「森の奥まで達して」でも、蔦が「官能的フラメンコの熱狂的な激しさで豊かなコントラルトを歌」い、肉食の睡蓮が鋭い歯でかみつく。「アダムがエデンを公開したような」森で育ち同じ人の異なる面を表すと見えた男女双生児は、十三歳でジェンダーの違いを感じ、牡蠣の味がするリンゴを食べてキスをする。

シネスセジアは視覚と聴覚などの錯綜を超えて、鏡の中では進化生物学的現象を起こすから怖い。⑥「肉体と鏡」で見知らぬ者同士が結びついた東京の安っぽいラブホテルでは、「鏡が時も場所も人格も消し去り」、「私は鏡に書かれた文章の主語」となる。

⑦「主人」の白人ハンターがアマゾン流域で買った少女奴隷フライデーは、性的虐待に耐えぬいてライフルの名手になるとジャガー化して、言語を失い、ひげが生え、泣けなくなり、主人を射殺する。

そして⑧「映像」は致命的な結果をもたらす。一人称の四話中、この私だけは男とわかるショックは三分の一まできて襲う。猛犬に守られた美少女アンナに拉致され、雌雄同体の「それだけで完結した合一のような」人物ティレシアスに、「鏡の中のあなたにキスしなさい」と命じられる。快感で失心した彼は鏡の中で目覚めた。濃い大気が音を動的な抽象画にする「目に見える沈黙」の洞窟で、アンナは「私をレイプした」。《女の報復》の隠喩どころか、現場描写は生々しい。

彼は少女と犬を殺してから、オトコ性を発揮する。「私は傲慢で、男として誇りを持って、鏡の中に映し出された私自身を、私の反転した私を、この世界の死を、抱き締めるために」、両手を差し伸べて進んでいくのだ。

それにしても、「私が本物の合だった。私は正と反を、あちらとこちらの世界を、編んで統合していた。それが失われてしまった」と嘆いて老衰し始めたティレシアスが、ヘーゲル弁証法の具象化であると、訳者の注釈ぬきで読み解ける日本の読者は多いのだろうか。

カーターは神話や文学の象徴的人物名や哲学概念などを常用語の短文にちりばめて、花火の息吹で重い寓話や激烈な物語をひらめかせる。訳者による簡潔で的確な説明が、連想の花を咲かせ、実存主義的な自己鏡像に野獣派の色彩をそえてくれるのだ。

栗本房子氏のイラストは、カーターのマジック世界を凝縮してみせる。鋭い棒書を23本も髪に挿したアーモンド型吊り目の花魁は、西洋人が思い描く日本の伝統的高級娼婦のイメージぴったりで、お見事! 乙女とジャガーの重なりあう横顔もゴシック童話風に美しく怖い。寄り添う若い裸身の足先が根をひろげ、伸ばした腕から枝葉が生い茂っていく双生児の樹は、急進的と自認したカーターの両性一体観、ジェンダー共生論の愛らしい表象とみえる。

肺ガンで世を去る一カ月前に「お寺の鐘を撞いてください」と、カーターは在日の友人に書き送った。中世文学専攻だった彼女が愛した形而上派の詩人ジョン・ダンは、「誰が為に鐘は鳴る、と問うなかれ。それは汝を悼んで鳴るなり」と1624年の説教集で諭している。女声的に高く軽やかに鳴り渡る教会の鐘と、重くずっしり響いて身をゆする男声的な寺鐘の合奏さながら、『花火』は読み返すごとに異なる音色を奏でて、華麗なシネスセジア絵巻を繰り広げてくれる弔鐘といえる。

(元イリノイ大学教授／比較文学)